

回数	特に意識した追加の事柄	意識したコーストレイル
3回目 2018(H30) 年 69歳	<ul style="list-style-type: none"> ・ 4 県一の宮神社参拝 ・ 4 県（各藩）の江戸時代藩主居城と跡地（全4箇所）立寄り ・ 4 県庁立寄り ・ 73 番出釈迦寺奥の院－捨身ヶ獄禅定参拝 	「高野山まで」片道スルーハイク （1番から） （最終帰宅日『黒河道』ウォーク）
4回目 2024(R6)年 75歳	<ul style="list-style-type: none"> ・ 道すがら最寄りの西国三十三観音霊場参拝 第2番 紀三井寺（和歌山県） 第3番 粉河寺（和歌山県） ・ 紀州東照宮参拝 	別格 20 か寺霊場差し込み 「高野山まで」往復スルーハイク （2番から）
図(表)－31b		

Q22；そもそもへんろの目的・ねらいは何だったのか？

A22；（ここでは精神面）一般的に言われる遍路の目的は、主に故人（家族・親族・親しい友人）の冥福を祈り巡礼する追善供養（先祖供養）、現世利益（家族の健康祈願、病気平癒）祈願、自分探し（癒し、リフレッシュ）の修行心、信仰心などと言われている、遍路の動機は人様々であろう。私は巷に言われる無宗教派だから格別の信仰心は無い。その中で私の4回に共通する点は、一発回答、“明確な目的は何にも無かった。” 動機としては、しがらみと腐れ縁でドロドロの娑婆、日常生活との縁切り作業を果たしたい、この日常のドロドロを一時清算・リセットしたい、ただただ、四国108か寺を歩いて繋いで見たいということ、一言で言うと「憧れ」からスタートしたものである。（こんな人が大多数であった。）私の心を代弁してくれるその真意・深意は、次の和歌（触発される至言・名言）にある。吉田松陰（江戸末期の長州藩士）が下田から護送途中の江戸は高輪泉岳寺前を通った時の、

「かくすれば かくなるものと 知りながら やむにやまれぬ 大和魂」

―――神仏巡りに行っても何の実利も得られるはずはなく、無駄だと分かっているながらも、訳もなくただ行きたくなるのだ。―――

「憧れ」とは、前記のQA7にも関連し、夢や希望というような茫洋とした次の期待感みたいなものがあった。

- ・ 日本の宗教文化の歴史に燦然と輝く功績を遺した空海（弘法大師）の事績に触れたい
- ・ しがらみや腐れ縁で繋がる現実の日常娑婆を一時断ち切って、束縛感の無い至高の自由雰囲気求めたい

行くからには、特別に立寄りたい場所・地点の目標（前記“おまけ”）は設定した。しかし、寺の縁起とか、本尊は何かというような寺院情報・寺院知識はまったく興味が湧かないので、宗派寺門はどうでもいいのだ。

4回目の四国へんろにおいて、宿で先達と称する3人と会って来た中で気になったことの一つ。ここでいう先達とは、4回以上の結願で申請し、講習会費5万円程度を支払って四国八十八ヶ所霊場会から認定された公認先達を指す。ある人から、四国遍路のマナーとして『遍路の目的を問わない』という不文律があると強調されたことがあった、何かの本には厳禁と書いてあった。

先祖供養や家族の健康祈願、自分探しの修行・・・遍路の動機は人様々であろう。私は対面すれば、平気で目的・動機を聞く、嫌がる人は1人もいなかった、聞かれてむしろ安堵するという表情を浮かべ

る人が殆んどである、むしろ動機を語り合う中から話題が広がって行くのだ。人は人情として他人の目的を知りたいものだ、自分のことも曝け出す上で相手のことが知りたくなる、ウィンウィンだ。四国遍路の空間にそのような規制的・制限的なルールは憲法にも、国連憲章にも書かれていないのだ。遍路道場^{どうじょう}は一部の先達や遍路回数を重ねた人が仕切る場では無い。ごみの不法投棄は厳禁というならばそのとおりだ、異なる思想信条を抱えた生身の人間が、その壁を越えて相互に無碍融通の世界観を共有する舞台なのだ、その中でそれぞれが新しい視点に気付き、互いに人生を学ぶ世界である。公序良俗に反する行動ならばご法度だが、しがらみの無い一期一会の対人対面対応は、個人の自由な発想・発案の膨らみを刺激するすばらしい雰囲気を整えてくれるのだ、人と自然の一体を促すポテンシャルを持つ華厳の世界なのだ、この壮大な遍路文化に金で買われた・金で買った先達の束縛・テキストは不要だ、一部識者の偉そうな分別定義は糞の役にもならないのだ。

そもそも『遍路の目的を問わない』となったきっかけを想像すると、誰かが、「遍路は信仰に基づくもの、遍路は特定宗教の熱心な信仰心を持った人がやるものだ。」という先入観で何かを書いた、すると、宗教とか信仰となれば、内心の問題、すなわち、遍路人の動機・目的は信教の自由に強く係るものだ、と見る、その目的に迫ることは信教の自由を侵す恐れが生ずるという論理を持った者がいたのではないかと推測する。ところが、遍路の移動手段は何であれ、現実の札所を打つという行為で巡礼する人達は、何か特定の宗教、つまり、どっぷり真言宗に皈依した人だけなのかということになる。そんな一神教的な強い意思を持った人は皆無に等しいであろう。目的を聞かれて話したくない人はその旨を聞いた人に言えば良いだけ、それで済むこと、恐喝してまで迫る歩きへんろ人にはいないのだ。

マナーと称するそのような規制は霊場会が叫んでいるのかーいない。空海が言ったのかー言っていない。(社)へんろみち保存協力会発行の「解説編」にも書かれていない。先達がほざいているのかー“何だあなた方が言っているのだ。” **そんな勝手な規制を云々するよりも、へんろ人に対して偉そうなことを言う前に、公共道路に対する歩道設置、へんろ小屋に対するトイレ完備などの環境設備について大きな声を挙げよ、そちらに注力しなさい、と忠告したい。**

Q23；歩きへんろは一人ですべきという理由は？

A23；打ち方（巡礼）としては、前記したように種々・様々な形態（ハイブリッドタイプ）はあるが、四国霊場の雰囲気丸ごとを実体感したいならば、へんろは究極の非日常性舞台と思うべし！である。

究極の非日常性舞台とは $\left[\begin{array}{l} \cdot 1人でこそ！ \\ \cdot 歩いてこそ！ \\ \cdot 日常娑婆とは断絶してこそ！ \end{array} \right]$ の時間・空間の使い方である。

そこでこそ、たがらこそ、新しい視野が広がる、新しい自分の再発見を体感出来るのだと分かった。

□ [1人でこそ！]

私の貴重な経験を紹介する。4回目四国へんろの52日目5月31日（金）、徳島県11番藤井寺近くの旅館「吉野」において上越市の小池さんとの懇談がとても印象に残った。歩くへんろとは何ぞや？ **そもそもの遍路とはなんぞや？ 本質に迫る問題提起と捉えた。** 会話のやりとりは図(表) - 32 のとおり。(以下、相手をK、私をOと記述する。)

K	今回は 88 か寺順打ち、5 年前以来の 2 回目である。その時は就感（達成感）が無かった。2 回目と言ったが、1 回目みたいなものだ。
O	なぜ？
K	（概要を語り始めた）1 回目も 1 番霊山寺スタートの順打ち、60 番からある男と知り合い意気投合して、その後ずっと 2 人で共に行動し 88 番大窪寺で結願した、さらにはお礼参りで高野山まで同行した。
O	分かった、達成感・充足感を得られなかった原因は 2 人で行動したからだろう。
K	大沼さん、後で、ずばりそのとおりと気付いた。
O	そんなのは当たり前だ、生まれる時は 1 人、死ぬ時は 1 人、へんろはその中間の擬死再生の修行というのではないか。歩きへんろは自ら作った究極の非日常性なのだ、覚悟は出来ているはずだ。自己責任のつらさ・不安を乗り越えてこそその満足感だろう。共に行動すれば、トイレに行くにしても、休憩するにしても、あらゆる行動の折に触れて相手に伺う必要があるのだ。その気遣いが苦難を突破しようとする姿勢に邪魔をするのだ、相手に気遣うようになったら、共同行動の共有空間は 2 人のもの、換言すれば自分の思いの半分は相手から抹消されている空間となるのだ。どちらかが何かを頼る心理は、相手があつての頼ること、故に、互いに頼るという心理構造が無意識層に自生するのだ、それは「自分は半分になった」も同然なのだ。1 人でスタートした歩きへんろはチームプレーでは無いのだ。野球やサッカーをすることと違うのだ。ただし、ツアーのように最初から複数で行動したのなら別だよ。
K	もっと白状すると、途中から遠慮と妥協で対処するようになり、計画時のイメージがどんどん壊れて行く感があった、帰宅後すごく後悔した。
図(表)－32	

□ [歩いてこそ!]

そして、小池さんに対し、図(表)－33 のとおりの長々と立ち話をしたことを紹介した。

29 日目 5 月 8 日（水）、四国のみち（山道）に入る直前、東京から来た夫婦（70 歳前後）の歩きへんろと出会った。	
夫婦	素が出る、考え方に違いがあることが重々分かった、夫婦だから我慢しながらの共連れとなったが、他人同士ならば喧嘩になるのではないか。
大沼	それはそうだ、1 日や 2 日の共連れならば自分の欠点を隠せるかもしれない、しかし、毎日 8 時間以上、それも 3 日、1 週間以上も歩き続けるとなれば、素が出る、地が出る、素が見えて来る、地が見えて来る、素地が出れば対立に向かうのは当然、しかし、喧嘩しなければみな妥協の世界、譲歩とはきれいな言葉だが、実は交渉の末の取引なのだ。もはやそれはへんろとは言わないのだ。
夫婦	何十年も連れ添って、お互いに人格というものを全て理解したつもりであったが、まだまだ溶け合っていないということが分かった。マイカーだったら、ツアーだったら気付かなかったかもしれない、共に 歩いてこそ 分かった、本当に良かった。
図(表)－33	

本書を整理中のさ中、図(表)－34のと通りの2024(R6)年6月25日(火)NHKBS20時から新日本風土記「四国八十八カ所巡る花遍路」の放送があった。

ある夫婦が88番大窪寺に結願する場面において「四国遍路はバスツアーで10年間の間に5回結願した、しかし、全然感動が無かった。だから今回は**歩くことにした**。」この率直な心境はこの夫婦だけでは湧かないだろう。

図(表)－34

私は、へんろとは、私は次のようなものだと捉えて、肝に銘じ直面して来た。

- ・1人でスタートした四国へんろは、歩きが仕事の究極の非日常性行動である。
- ・人間(私)の心に棲む「魔性」と「仏性」の2人自分の格闘舞台である。
- ・あらゆる出来事の結果責任は自分1人が負う行動である。

遍路(巡礼・巡拝)の交通手段は様々ある、しかし、自分の全身全霊を投入した歩きへんろでなければ、感動が沸かないのは至極当然のことなのだ。ツアーでは、ご朱印を貰う納経帳はバス会社の添乗員(担当者)が一抱えして納経所に行き、各個人は寺側担当の墨書・押印を見ていないのだ。

以下の対応は全てが自己判断・自己決断である。

- ✓1；計画したルートは携行しているGPS機器(オレゴン650)で確認出来るが、現地においては、

〔 廃道化
大きな崖崩れで道が消失
小川が増水
橋が崩落
広範な道路工事で出入口不案内〕

など予期せぬこと、立ち止まざるを得ない壁というものに何回も

突き当たって来た、結果して無事に通過出来た。そういう時には猿田彦大神の示現なのか、しばし、じっと睨む(集中する)と、臨機応変なブレークスルー対応策がぱっと浮かんで来た。

- ✓2；朝の出発時から台風の強風と豪雨、途中突然の雷雨や線状降水帯などの天候不良に遭っても、雨具のポンチョを着用し歩き続けた。1時間もすれば全身ズブ濡れ、1日中8時間以上も雨の中という事は何回もあった、『滝行』と思えばそれも楽しかりけれ、であった。
- ✓3；微熱、風邪ぎみ、下痢、鼻水、靴擦れ炎症、ねんざなどの体調不良も時々襲って来たが強行した。『小病は大病化に急転直下も有り得る』が、現地ではこのような言葉に取り付く暇は無かった。
- ✓4；宿は、インターネット検索で調べるが、ホームページを持っていない小さな宿が殆どなので、設備やサービスの程度は知る由も無い。エイヤと決めるが、総じてきたな穢く当てが外れるということもままあった。そんなことよりもおもてなし・お接待の方がずうっと大きかった。

様々な予期せぬことがあったとしても相談する人がいない、相談しない。また、私は逃げることもしない、**全事象に係る結果の善し悪しは自己の人間総合力の結末である**、責任を他に押し付けようがない、押し付けない。全部をそのまま受け入れざるを得ない、総ての結果をそのまま自分が背負うのだ。予想外でも他に文句は付けない。**怒りが湧くとすれば、それは自分のふがいなさが全ての原因である**、当然だ。体験下には、様々なハプニング(重大アクシデントや命に係わるトラブルは一度もなし)があった。

あさかごんさい安積良斎(江戸後期の儒学者)は「みちなかば途半にして怠れば、かえ前功を失い、うた未熟に復る」と詠ったが、私の途中での諦めは、過去の全てのスルーハイクが無駄になってしまうとする恐怖らしきものを感じた。すると、フロンティア・スピリット(道無き道に立向かう精神)が燃えた、ルート・ファイティング(道なき所に吾が道を開拓)の闘争心が湧いた。日頃の身の丈を超えた勇気が湧いた、どこから湧くのか不思議

議さを感じた。眼前に何らかの障壁が立ちはだかる時に思い浮かんで来るのが中国古典の一つ「孟子」の言葉「天の將に是の人に^{まさ}大任を降さんとするや・・・」です、天から降りて来る押背の信号であった。

自らがつらい苦しい思いをしてやっとの思いで札所に着き、御経を読誦し、その証として、納経帳を納経所の窓口に差し出して、朱印を貰って初めて、その節目の達成感があるのだ。バスツアーとか、マイカー利用などの（安直な）遍路は、繰り返すが、朱印帳を埋めたというだけの表層的・一時的な思い出に雲散霧消してしまうのだ。日常娑婆とは断絶し、日々の長時間・長距離歩行の苦しい中での自己決断の積み重ねが例え予想外のことに遭ったとしても達成感・満足感（やり切った感）に繋がるのだ、なぜなのか？ **至高の自由裁量の世界観で自己決定しているからだ。人間は無意識の中に芽生える自立心・自主独立心・独立自尊の中で、思う処の遍路ワールドの主人公になり切りたいのである。このような自噴する心に従順にならない遍路は、絶対に充足感を齎さないのだ。**もっと言うならば、宿に頼らずに野宿してこそ「真」なのかもしれない。

それでは歩きへんろは難行苦行なのか？という疑問も湧くが、煩惱深き私は聖人であるまいし、聖人に成り得ないし、たかがこれほどの如くは悟りを開くための難行苦行などとはまったく縁遠いものである、悟りを開くなどという大それたことはまったく浮かばない。中村元・田辺祥二著「ブッダの人思想」によると、仏教の始祖実在したブッダは出家6年後に悟りを開いたが、途端に悪魔が出現したとある、常に煩惱や迷いが押し寄せて来たが、克服の道は一生の自己浄化の道、日々の清浄行であると書かれている。「お前は仙人でもなったつもりか、人間逃避か、ひきこもりか」などと揶揄されるが、まったく逆である。「有縁無縁・^{え た き し ょ う}依他起性（他との関係で生かされている）」の世は承知の上、そこからあえて腐れた縁を切る、しがらみを絶ち切った処で体験出来る命の醍醐味を味わいたく、**むしろ積極的にまったく新しい人との出会いを求めたく、新鮮さを求めて歩き旅に出かけて来たのである。**

Q24；グループによる歩きへんろは避けるべきという理由は？

A24；Q A23の裏返しとなる。「四国霊場八十八箇所 歩き遍路の案内書」（亀山忠夫著）に次のような記述がある。「・・・鶴林寺の逆打ち下りで会った5人の中年女性グループ内の1人が焼山寺で“二度と遍路には来たくない”と途中で帰られました。ご自分のペースで歩かれなかったのです。」私は1回目歩きへんろの時に、ある夫婦と一緒に始めたが、やはりペースが合わないとお様が途中で止めたという話を聞いた。2名以上の複数の歩きへんろにおいては、「もの・こと」に対する考え方の違いという以前に、まずは、総体ペースが合わないというのが最大の問題になるのだ、たった数日の歩きではないのだ、1週間、2週間、そして、50日前後の毎日がただ歩く日々である。スタート時点では、気心の知れた仲間内ではさぞとても楽しいだろうと、未来は私達のものとうきうきとなるだろう、ところが、一人は調子は良いが、相方はすぐれない状況になるとどうなるか、前者は後者を良しとは思わなくなる、後者は“先に行っても良い”という。すると、「一緒、お互いに助け合う」とした所期の志は壊れて行く、一事が万事、心にずれが生ずる、そして、悪循環となる、両者の歯車が合わなくなるのだ。

そもそも、四国歩きへんろに旅立つ時の動機・目的はみな違うだろう、発心発願の意図・内容とその意志の強さは違うだろう、現地での立寄りしたくなる関心の対象・的は違うだろう、天候も変化する。そうしたら、体力的なペースもあるけれど、元来根源的に異なる心技体と発心・立志の波長を、互いに合わせることで自体が深刻な問題である、加えて、複線の遍路道があり、刻々変化する現地の道と天候、すなわち、天地の状況変化に即応した行動的総合調整（判断）に係る合意形成は至難の業というもの。つまり、諸条件を総体した総合ペースが違うのだ。「一緒、お互いに助け合う」とした所期の志は壊れて行く、一事が万事、心にずれが生ずる、そして、悪循環となる、両者の歯車が合わなくなるのだ。

バスツアー等のように複数になったら、日常生活を引き摺った巡拝、俗世のゴタゴタ・愚痴をそのま

ま引き摺ることになる、そんなのはもはやへんろ（遍路）とは言わない。ただ行って来たという物見遊山（気晴らしにあちらこちらを見物すること）の遊び、観光旅行に過ぎない、納経はスタンプラリーに過ぎなくなる。宿で見聞きするが、殆んどの方は、知人・友人と日常生活同様に電話で長々と喋っている、安普請部屋の壁越しにみな聞こえる。それではへんろに没頭・集中していないので直感^{はた}は磨かれないだろう。そのように**煩惱俗世・日常娑婆をコピー**している人の殆んどは現役世代、あるいは仕事を持っている人達である。へんろを、ピラミッド型組織の中でもまれて疲弊している身のストレス解消の場とするのはいいだろうが、とてももったいないと思う。現役世代は時間的制約上区切り打ちが多いが、短い期間ほどに遍路修行に没頭・集中した方が身のためではないかと傍から感じた。そういうことではへんろ道に多くぶら下げられている「心をあらい、心をみがくへんろ道」（後記図-38a）という激励の言葉は無意味なものとなる。

以上は私の説であるが、人間の素朴な心情心理に即せば当然のことである。したがって、歩くへんろは一人に限ることとなる。

どうしても、二人（複数）で徒歩へんろをやるのであれば、個々のプライド・優位性（私が・・・という優越感、我欲）を100%捨てられるかにかかっている。つまり、互いに自他の境界性を捨てる覚悟があればOKということである。

Q25；お接待文化とは何か？

A25；歩きへんろ人は弘法大師の身代わりだとされる信仰があり、現地の住民が、通りがかりのおへんろ人に見返りを期待せず・求めずに、物を施すなどの親切行為を「お接待」と言われている。難儀している姿に対する敬意と感謝を表す行為でもある。飲食物や時には現金までも、あるいは宿においては洗濯・乾燥やおにぎりの提供などもある、また、荷物を置かせたり、自家用車に乗せたりすることもままあることである。その『お接待を断るな』というマナーがあると何かの本にあったが、そんな規制は法令のどこにも書いていない。

私は歩いている途中では、“気持ちだけは頂戴する、ありがとう”と御礼の言葉を発しつつも、皆無というほどに頂かないことにして来た。着衣の洗濯・乾燥は素直に受けたが、毎回同じである。私は以下の理由を見聞きしているからだ。

殆んどの方は、それらのお接待を受けたことを自慢げに話したり、書籍に書き込んだりのオンパレードである。お接待を受けたことを、さも、自分だけが特別扱いされたという妄心が慢心を掻き立てるのであろうが、おぞましいものである。お接待を平然と受けるようになると、人間は恐ろしいもので、もっと・さらに欲しくなり要求型に変質する、あるいは、多寡を比較・競争したくなる、こうなるとお接待という本来の無償精神世界は飛んでしまうのだ。お接待を受けることに何の優越感があるのか。お接待を受けることが“立派な人間と見られて選ばれたのだ、という錯覚・妄想から来る心理だ。お接待とおせっかいは紙一重であるというコラムをネットで見た。私のように押し付けと受け取る人もいるのだ。**お接待はもちろん受けて側に感謝の念を引き起す動機になり得るが、反面、欲望惹起・獲得競争という醜い面のトリガーにも成り得るものなのだ。**

図(表)-35は4回目の22日目5月1日（水）46番浄瑠璃寺の少し先の接待所（NHKでも取上げられた）である。今回立ち寄った唯一の接待所であった。ここでは15分くらい懇談し、茶菓子をご馳走になったことから私は逆接待と称してきちんと200円を置いて来た。



図(表)-35

Q26；荷物を預かって貰えるか？

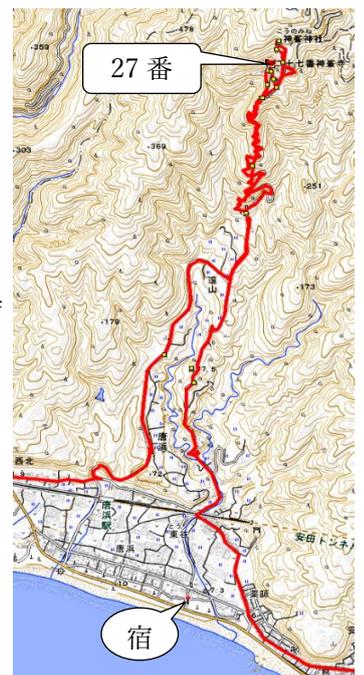
A26；宿を拠点にそこに荷物を置いて打つ人が多いようだ。図(表)－36のとおりの良い例がある。27番こうのみねじ神峯寺を打つ場合、麓にある民宿「とうの浜」に荷物を預けて貴重品と納経帳のみを持って往復する人が多い。

私の場合はどうか。4回のへんろにおいては一度も（1回も）荷物を宿に預けたことは無い。当然荷物を置きたくなる、しかし、私は一度も預けていない、全て背負った。なぜなのか？ 非常災害・大災害を想定したリスクマネジメントである。例えば、私の身に異常が無くても、宿が火災などに被災する可能性はゼロでは無い。私は自宅から遠く離れた地に来ているのだ、そうなったらお手上げである。だから、私は荷物を絶対に預けない。ある宿で、このことを話したらある人から「それは考え過ぎだ」と一蹴・一笑された、果たしてどちらが適切で現実的な予見可能性を持った対応だろうか。ちなみに「背負う」というキーワードに繋がることとして、荷物を背負ったまま（ザックを下ろさず）本堂・大師堂の前に出向き、読経奉納ことを原則とし実行して来た。外国人に多いそうだが、宿から宿への荷物送付を宅配便に依頼したり、中には、お接待にしてくれという人もいるとのこと。

Q27；歩いている時は何を考えていたか？

A27；まず、札所間の長い三大長丁場を挙げて置く。①37番岩本寺～38番金剛福寺；80.7km、②23番薬王寺～24番金剛福寺；約75.4km、③43番明石寺～44番大宝寺；約70.0kmである。四国へんろはそれらの札所（寺院）を巡ることであり、それが目標となるが、ところが、こうも長いと2日～3日も要することになる、すると、札打ちがないのに宿泊を伴う、すると無駄ではないかと邪念が湧き、早く着きたいとなる、すると何がしかの公共交通機関を利用したくなる、多くの歩きへんろ人は誘惑に負けて動力交通を利用している。しかし、私は誘惑に負けないなどという強がりには誘発しない、とにかく歩き続けたいとする一心のみである。そこで、足の靴擦れに耐え、豪雨の中で着用雨具による蒸し暑さを我慢し、特別の意図・目的も無くただひたすら歩く。種々・雑多・諸々のこと——政治・経済・宗教・社会問題・スポーツ・コミュニティ・知人・友人・家族・人生・・・人生万般が浮かんで消え、消えては浮かび、しかし、その感情に答えることも無く、適切な答えが浮かばず、時には不道德なこと、不埒なこと、卑猥なこと・・・それらを正義感如きものであえて潰さない、わざと浮遊させてただ無心で歩く、時に放心状態となる、一時神秘体験のような世界観となる、10時を過ぎ、昼になり、刻々と時間が過ぎ、いつの間にか宿に着く。論理的に整合性の取れない諸々の感情や思考がごちゃ混ぜの中で正反合が繰り返される。こうでなければならぬとか、あうであるはずであるとか、とにかく、「もの・こと」を象かたどりする、型に嵌め込むことの馬鹿らしさに気付かされる。毎日がこの繰り返しである。そして時々急に感情が高ぶり無性に涙が出て来る、そして思い切り泣くことにした、泣いた。

□1；陽明学の王陽明は「山中の賊を破るは易く 心中の賊を破るは難し」と名句を吐いている。途中で足の炎症が起こると挫折感、つまり、“こんな痛い思いをして何のために歩くのか？”、札所間が長くただ移動だけのために数日も歩く、雨の中ではただ足元・大地と睨めっこの1日となると“歩いて意味があるの？”という自問自答からは中断・撤退よぎも過って来る。しかし、その心中の賊と剋し合う武器は何？かである。学者風の難しい知識は不要、賊すなわち魔性とは簡単に妥協しないということだが、何も決意などという固い言葉は不要、必要なのは無心の赤心だ、正徳充滿の裸の心、素すの心と向き合えば良い



図(表)－36

のだと分かる。私の精神状態は何時も「仏魔同居」^{どうご}においては、そのような葛藤やら悲喜交々であるが、「禍福は糾^{あざな}える縄の如し」と言われるように、「苦と楽」「不幸と幸福」「不運と幸運」・・・二項対立関係は総ての「もの・こと」に生ずるもの、しかし、絶対に留まることは無いのだ、心の中のうごめき、現象認識は「入力 (Input) - 消化 (Process) - 出力 (Output)」心身作業と相まって繰り返えされるものと思えば精神疾患は発症しない、むしろそのような疾患の襲来をブロックすることになる。湧き出る心に従順に生きなさいという指令が天から垂れて来るのを覚える。そういうことを実感する歩きの旅路となる。小中子供の教育に当たっては、成長に伴う知識には必ず陰陽二元の表裏を伴うものだ、そこには必ず矛盾・対立を伴うということを教える必要がある。単純に「悪いことはするな！」だけでは、「善いこともするな」となる。つまり、一面だけを否定する教え方は、成長・思春期の心の葛藤に真に向き合った解決のヒントを与えることは出来ない。「仏魔」両面の存在 (仏魔同居) を肯定した上で、仏性磨きを考えさせる教育が大事なのだと気付かされた。

□2；共通して、1日の精神状態は、毎日が概ね図(表)-37のように変化した。

□3；こうした中、見えないが、はっきりと認識は出来ないが、何かの不思議な力の作用を感じるようになる、どこからか激励の鼓舞が飛んで来る、すると心が、弱気から能動的になる、よし今日も歩くぞ！ この繰り返しで日々が繋がって行く。ポーと無心で歩くようになる、まさに天地人一体になったような観——天地人 (天；天空の空模様・気象。地；道・景色。人；私・他のへんろ人) 融合感、万物天地同根感を覚えた。こうすると私のへんろは「歩禅道場」である、黙々と歩くだけの道場である、すなわち、立ち禅修行なのだ。

(a)朝のスタートから2時間程度は、	胸を張っててんこらふいてルシルン気分である。	20%	一日の気分の割合
(b)その後は、	荷物が肩に食い込んで重さを感じるようになる。 地面とのにらめっこが多くなる。 頭を垂れて懺悔懺悔となる。	60%	
(c)13時前後から14時半前後までの間に、	疲労・消耗感が出て体がだるくなる、眠気が襲って来る、体が浮遊する、ふらつくようになる。		
(d)その後、宿までは、	気を取り直す、すると復元力を得たり！ とても快調になる。宿の玄関では外交辞令の作り笑顔で挨拶する。	20%	
図(表)-37			

挫折感がしょっちゅう押し寄せて来る、しかし、慄然と立つものではないが「憧れ」に対する挑戦意欲が自発して来るのを覚えた。まさに、禅の曹洞宗の坐禅は「只管打坐」^{しかんたざ} (ただひたすらに坐る) に通じるものがある。そんな中で道すがら図(表)-38aのとおり「心をあらい心をみがくへんろ道」(弘法大師空海の言葉という説が有力) が目に入る。また、同図bのとおり人生即遍路 (俳人種田山頭火の言葉か) が目に止まる。両方ともへんろの神髄を表すフレーズだ。

□4；それらはみな心の重心、すなわち、小宇宙たる私 (人間) の深奥無意識層にある「華嚴界

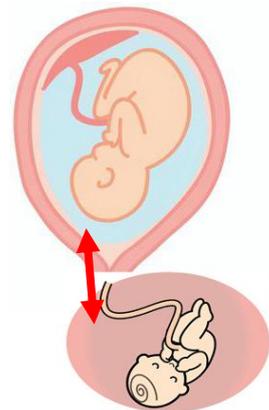


図(表)-38a

図(表)-38b

ZPF」から生まれるのだと気付いた。 これらをイメージ図化すると図(表)－39

(Xマイナビ DOCTOR より拝借) のとおりのへその緒で繋がった母と胎児の関係が浮かんで来た。母(へんろ時空)と胎児(私)の関係は、胎児には母親の総ての細胞機能が入っている、胎児の総ての情報が母親に繋がっており、歩いていると、私は胎児となって、母親の腹に入ったり、出たりというイメージであった。そのまま華嚴世界の象徴――事事無碍法界の感得である。ただし、無我夢中の無心の境地がそうさせるのだろうと分かった。



図(表)－39

□5；無心とか無我夢中の言葉を多用したが、禅の言葉に「無一物中無尽蔵」がある。何も無い処にこそ無限の宝蔵が具わる、すなわち、無心の中にこそ真理が観えて来るとのことだが、“無心、無心・・・”として意識して無心に成るものではない、

眼前の課題(札所を目指し歩き続けること)に「而今現成」(今が自分の全存在)を以って全力投球すればそこに体感出来る不思議な世界に出会えると思った。こんなことを言うと、全力投球などということになればスタミナが持たない、時機に息切れする、遊び(余裕)の無い日々は窮屈になるとかの言葉尻を取って否定的な見方はあるだろう。あるいは、今の自分はあえて7割に抑制しているのだ、だからその気になれば全力を出し切れるのだとか、いろいろ言い方はあるだろう。私の言う而今現成の全力投球とは、身の丈のその時の体調に合わせた緩急があって然るべきではあるが、日々の時間を費やすに価値のある目的・目標や夢をきちんと持っているのかという問題意識・自問自答の強調なのである。懦弱の悪魔に引き摺られるままに妥協、中途半端にして、自分にもう一人の自分が嘘を付くことはしない。また、問題意識がありながら“そのうちそのうち”と対処を伸ばしに伸ばしたくなるというのは人情であるが、打つべき札所が待っている、宿が受け入れ準備を整えて待っていると思えば、こちらの勝手な都合で歩くことを放棄することは出来ない、娑婆では何か条件や環境が整わないと着手しないで済むことが多々あるかもしれないが、そういう自己都合が許されない環境であるが故に、只々“歩け歩く”しかないのである、こういう場が邪悪な利害損得とはまったく縁のない無心の世界に連れて行ってくれるのであろう。なお、この無心であるが、泥棒を、闇バイトの強盗を、あるいは他人殺傷を無心でやるというは無心では無い、それは誰が見ても明確な意図であろう。「目的合理性」という説があって、何か目的を決めると、その達成のために合理的な無限の理屈を作ることが出来るということからしては、無心になるにしても依って立つ動機が大事であるといえる。

Q28；へんろ順礼(へんろ^{とそう}抖擻行)の証は？

A28；御朱印の貰い方としては

①御朱印帳
②掛け軸
③印取白衣

の方法がある。

内容は別記したとおり。

遍路シーズンになると、納経に(御朱印を貰うに)長時間待たされたという人もいた、混雑している時は納経所担当者に「すみません、歩きへんろです、割り込ませて貰うと有り難いのですが。」と率直に相談して来た、譲って貰い私は5分以上待った時は無い。ただし、高野山ではそうはいかず30分ほど並んだ。

Q29；他に誇れる独自取組みは何か？

A29；大きく二つに分ける。

(1) 後半のへんろトレイルに係る共通的事項

内容は別記したとおり。

(2) 4回の四国へんろにおける特筆事項

図(表)－40を踏まえて以下の4点に絞る。

後半へんろトレイルに共通の実施項目	四国へんろのみを抽出			
	1回目	2回目	3回目	4回目
[1] エネル源『大香ブランド老魂サブタイトル』の設定	○	○	○	○
[2] 亡き家族供養が見える化	○	○	○	○
[3] 遊び心の験担ぎと縁起物				
『聖水』持参	○	○	○	---
『アオキ葉』持参	○	○	○	---
[4] シンクレティズム具象化の自由白衣を持参	○	○	○	○
[5] 独自の御経を読誦・奉納	---	○	○	○
[6] 地元の社寺に仁義を切ったお参り	○	○	○	○
[7] 順番に拘った順礼	○	○	○	○
[8] 「起承転結・阿吽」で円環成就	○	○	○	○

図(表)－40

□1；108札所を結ぶ道――88か寺周回1,200km長、102か寺周回1,400km長を、一切の動力交通機関(乗り物)を使わずに、歩き切って順礼したこと。言い換えると、108の札所を結ぶルート上に歩点の空白を生じさせなかった、あるいは、公共交通機関の痕跡を入れなかったということ。なお、当日の宿に着いてから、離れた所へ買い物のために公共交通機関を利用したことはある。

□2；歩き切った足跡の証として、自動記録されたGPSトラックログ(歩いた科学的根拠)を保持していること。なお、2011(H23)年62歳旧熊野古道スルーハイイク以降は、今回も含めて全てGPS機器を携行して来た。

□3；お礼参りのために高野山へ歩いたこと。3回目は徳島(1番霊山寺)からの片道、4回目は徳島(1番霊山寺)から往復したこと。四国内遍路を結願した人達の多くは、引き続きであっても、一定の期間を置いた後日であっても、高野山お礼参りはやっていることだろう。それらの移動手段は100%公共交通機関利用であろうが、歩いて往復したのは初めてでないか。

□4；宿にはきちんと礼儀を尽くしたこと。個人経営宿の出発時に特に心掛けたことがある。四国とは限らず出発時には、ご主人、あるいは女将さん、あるいは両方から見送りを賜るが、その時、私は努めて、しっかり相手と対面し「ご主人と女将さんのご健勝を祈っています、また、お宿の商売繁盛を祈っています、そして、女将さん！いつまでも若々しく！」と言って別れた、すると満面の笑顔で返された。部屋を出る時は、寝具類はきちんとたたみ、テーブルやリモコンは元の位置に戻して出て来た。「旅の恥は掻き捨て」とならないように気遣って来た。図(表)－41のような他人の節義崩壊丸出しを垣間見て来た、写真は無いが、もっと酷い状況で宿を発つ人を散見した。



図(表)－41

Q30；山形県内在住へんろ人と会ったことがあるか？

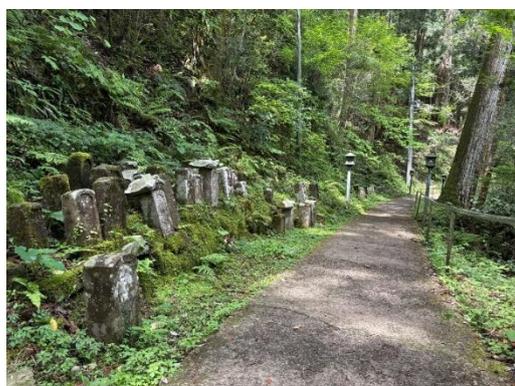
A30；純粋な歩きへんろ(宿派、野宿派)と会ったのは4回目における1度

(1人) だけである。41日目の5月20日(月)高知県伊尾木ステーションゲストハウスにおいて、山形市内の佐藤さんが初めてである。これ以外に、これまでの4回のへんろにおいて、宿に入る度に“山形県人の宿泊を記憶しているか？”と聞き訪ねて来たが、一度も聞いていない。バスツアーやマイカー利用者は一定程度はいるだろうが、い`08か寺巡礼において、全ルートについて動力機関を一切使わずに歩き切ったのは、現時点では山形県内では私だけであろうと推測している。

Q31；遍路墓とは何か？

A31；現在は観光気分で気軽にお遍路に行けるようになったが、昔は食べ物・水や宿の確保は今より困難な状況下、死を覚悟した厳しい修行であった。厳しい環境に身を置いて精神や肉体を鍛えていたのである。死と隣り合わせだったお遍路はどこで息絶えても成仏出来るようにという考えで、死に装束である白衣、卒塔婆の代わりとなる金剛杖、棺桶の文字が書かれた菅笠を最初から身に纏いお遍路をしていた。途中で行き倒れてしまう人が多数いた。道半ばにして無念、故郷に帰れなかった、そのような人を地域の人が埋葬しお墓が作ったのだ。このようなお墓は「遍路墓」と呼ばれており、地元の人が遍路墓を子孫へと語り継いで、管理を行っているために現在でも残っているのである。

図(表)－42aは本札45番岩屋寺に至る登りの道沿いにある墓だが、全て遍路墓である、同寺僧職の方に確認した。同図(表)bは今となっては街中になったが「四国遍路無縁墓地」(愛媛県今治市)と表示している。図(表)－43は道すがらにあったものの一部である、他の札所の関係者や地元の人達にも聴き取りで確認した。あちらこちらに沢山あったという印象である。4回目の道すがら歩きへんろの僧職(住職見習い)4人に会ったが、その中の1人と遍路墓が話題となり、山形県西川町「高・清フレンドリー古道」に存在する墓石の写真を見せながら取り上げた処、山中にある墓という点、墓石の状態、安置された環境はまさに遍路墓に類似し、その道に、その地に行ったからこそその墓の安置・建立である共通認識で一致した。へんろに行きたいという希望・願望(架空)に基づいて、あるいは、その人の思いを汲み取って、現地に行かないのにも拘らず、山中に墓標を置いたというのでは無い。むかさり絵馬のような奉納という意図を持った絵馬に準ずるもの、あるいは、絵馬の意味合いから派生した仮想墓石のようなものでは無い、遺族の故人の成仏を願うだけでそこに墓石を置いたとなどいうことは無いことは明白である。厳粛な「死」と一体の墓標である。逆に墓標たる墓石のある周辺で死去したという証拠である。繰り返すが、その道に踏み入れたことを証明するれっきとした証拠・証左である。



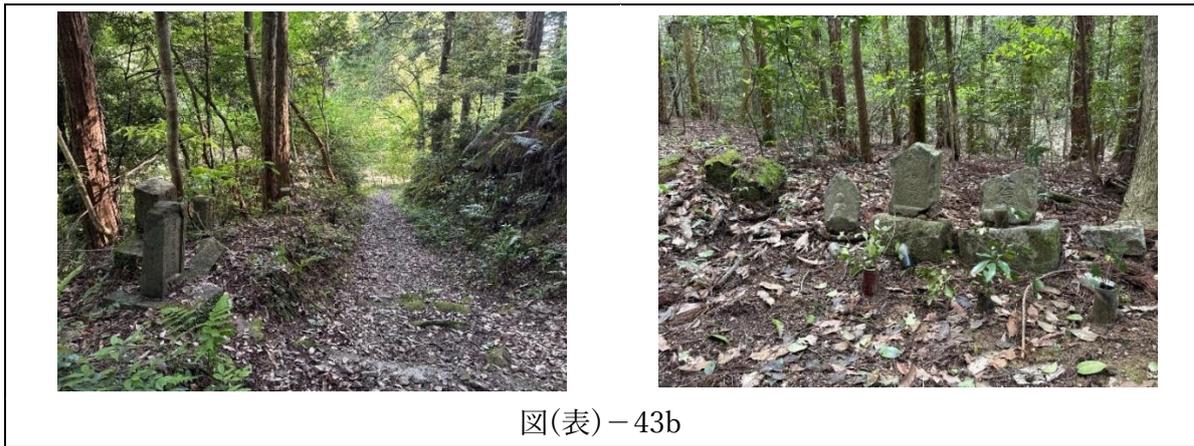
図(表)－42a



図(表)－42b



図(表) - 43a



図(表) - 43b

Q32；出羽百観音（最上三十三観音霊場）との相違は？

A 32；さて、山形県内出羽百観音霊場との違いは、札所寺院や境内の規模においては、全般的に四国の方が大きいかもしれないが、中には出羽の方が大きいものもある。巡礼時の姿、身に付ける用品（支度用品）はほぼ似ている。出羽百観音霊場と四国 88 か寺霊場の規模・距離面の比較は図(表) - 44 のとおり。出羽の方がほぼ2倍強の過密ということになる。なお、出羽百観音を一气通貫で繋ぐとすれば、当然距離は加算なる。出羽百観音はピークハント型・ピンポイント型の巡礼、四国霊場は靴紐ニッティング型・ブートストラップ型（天地人・寺を編む）の巡礼と自称する。前者は歩き巡礼に配慮した環境を提供していない、車で来てくださるの世界である。後者（四国）は車だけでは無く「歩くへんろ」の有り様も大きく位置付けて受け入れ態勢を整えている。だから、出羽百観音と四国霊場は似て非なるものだ。

山形県 1 県 100 か寺			四国 4 県 88 か寺 (22 か寺/県)	
巡礼霊場	一周距離 (概算)	所要日数 (25km/日)	一周距離 (概算)	所要日数 (25km/日)
最上三十三観音	311km	13 日間	1,300km (325km/県)	52 日間
庄内三十三観音	240km	10 日間		
置賜三十三観音	184km	8 日間		
計	735km	31 日間		
札所間隔 約 7.4km			札所間隔 約 15.0km	

図(表) - 44

四国も最上（出羽）も御経を挙げつつお寺を回る（巡礼）という面では同じ様相である。したがって、**四国に行ったとしても、車利用では何も変わらないではないか、“何だ、ただの寺回りか？”**となる。まったく（あまり）感激は湧かないであろう、（あえと言うが、断定出来る）、だから、**1人の歩きへんろを強く推奨するものである。**

Q33；四国遍路の観光面から学ぶことはないか？

A33；四国は地元の人達の観光PR・誘客戦略の熱心さには畏れ入る、参った！だ。 **私が様々な人達の声について図(表)－45**のとおり**に私が総体的に整理した**が、人集めのために人間の心情心理を突いた上手いやり方が浸透していた。あちこちでそのような方便で、それも熱心に言われた。観光誘客作戦の神髄を見た感じがした。従来型どおりの既存先入観で人間心理に基づかない上から目線の掛け声や紙切れパンフレットでは人は集まらない。滞在時間を長くする仕掛けは如何に？の視点である。四国のやり方は頭！（知恵）を使っているのだ。観光業に携わる人達への大なるヒントが隠されている。

特に歩きへんろに焦点した四国地元民の殺し文句「キャッチフレーズ（キャッチコピー）」の提案	
①88札所の名前、全部を覚えたか (覚えるまで来い)	②親・他人のための利他行をやっているか (皆のために来い)
③逆打ち”逆回り”でお大師に逢えるよ (違う景色を見よ)	④阿吽で閉めろ・円環足跡で閉じれ (原点回帰、初心に戻れ)
⑤歩きへんろを最低3回来い (「石の上にも三年」継続は力なり)	⑥高野山参りをしろ (礼を尽くした挨拶参りと感謝参り)
図(表)－45	

周遊、滞在型観光などとキャッチフレーズ（キャッチコピー）は良いが、「自然体で留まる」という人間動態に着目しなければ意味が無い、その象徴はエリアを**歩いて貰うこと**だ。歩くとなれば日数が掛かることから食料の持参も、宿の宿泊数も多くなる、自ずとお金が投じられることになる。図(表)－46aは建築家の歌一洋さんが2000年に始めた、遍路小屋を建設するボランティア活動「四国八十八ヶ所へんろ小屋プロジェクト」の成果の一端である、こういう東屋あずまやを四国内に89個所も設置したという、休憩や宿泊場所として活用されている。なお、同図bは1民間企業が社会貢献活動の1つとして建設した立派な遍路小屋である。



なお、四国が一体となり、世界遺産登録に向けた総合的な推進体制である「四国遍路世界遺産登録推進協議会」を設立している。組織は、会長（四国経済連合会会長）、副会長（4県知事）、構成員（4県、58市町村、地方支分部局、大学、霊場会、経済団体、NPO法人など[構成員の詳細は別表参照]）を以って構成している。

Q34；なぜ、四国遍路はこれほど人気があるのか？

A34；もちろん、歴史云々の魅力はあるが、それはさておいて、QA32と密接な関係があり、車社会においてもこれほどまでに遍路観光が発展して来たのは、古来お接待文化が育まれた中で、『歩く道』、『歩くへんろ人に配慮した施設などの環境』を整備・継続し、「歩く文化」が紡がれて来たからであろうと思っています。前記へんろ小屋プロジェクト活動がそのことを象徴しており、長年に渡って歩くへんろ人を迎え入れて来た歴史があったからであろう。歩くへんろ人がいたからこそにお接待文化が浸透したのである、もしも、「歩く」キーワードが通用しなかったら、車社会においてはこれほどまでも遍路観光は発展しなかったであろう。今時の車社会にあっても、動力（動態、デジタル）×人力（静態、アナログ）の相補性相乗効果と相まって今昔の不易流行的調和が図られて来たからであろう。逆説的ではあるが、徒歩巡礼が衰退すれば、車移動（ツアー、マイカー）巡礼はこれほどまでに隆盛することは無かっただろう。徒歩巡礼を何回も出来ない人は車巡礼に替え、車巡礼者は徒歩巡礼に挑戦したくなるものである。各県別の人口（総務省統計局、令和4年10月1日現在）を見ると、図(表)－47のとおりで愛媛県を除けば山形県よりも少ないのである。

山形県	徳島県	高知県	香川県	愛媛県
1,040,971人	703,745人	675,710人	933,758人	1,306,165人
図(表)－47				

四国霊場巡礼には年間約15万～20万人が訪れるとされており、1県当り単純に四分の1では37,500人～50,000人となる、山形県内の統計は見当たらないが、2桁は違う（山形県は少ない）のではないのか。

Q35；「お四国病」とは何か？

A35；私が発症した「お四国病」とは、寺院の規模とか、境内の広さとか、仏像の文化財的要素とかは私には余り・・殆んど興味が湧かない、なぜならば、さらに上手^{うわて}に行く西国三十三観音霊場や奈良・京都があるからはそういうものと比較はならないからだ。私は、四国へんろを4回（歩いて4巡）も敢行したが、寺院の何たるやの知識情報は全くと言っていいほど関心は無いことから頭に入っていない。また、仙人になって籠るなどということにも全く関心がなかった。

出発前の自宅では逡巡することが多々あったが、現地に入ってしまうと、88番大窪寺に（あるいは1番霊山寺に）立てば、後はただ、一周一巡することだけが全身に漲^{みなぎ}った。弓道精神の「貫中久」が浮かぶ。弓道には「貫中久」という言葉があり、貫は弓矢を的まで到達させるために、射貫く貫通力を与えなければならない。中はその貫の集中を以って的中力を与えなければならない。その貫徹力と的中力の一連の精神・所作を長く持ち続けることが弓道精神であるという。中貫久という流派もあるようだか、「貫中久」は古くから言われて来たようであることからこちらが好きである。初心貫徹を以って1つ1つの目標点（お寺）を順番通りに繋ぎ^あ（中てる）、ついには結願を果たし、その心を忘れずにそれ以降の生き方に活かして行く覚悟の行動を（単なる巡礼では無く）「順礼」と称している。「貫中久（発心－決心－続心）」が養生される順礼の魅惑に訳も無く嵌まった、嵌められてしまったのである。

私の四国の歩きへんろに対する最大の意義は、知識云々よりも、人生道・人間道を学ぶことに最大の意義を感じた、天地人壮大ドラマの舞台に身を投じ演じる当事者で有りたかったのである、天地人ごちゃ混ぜの世界にどっぷり浸かることが出来るからだ、これが私の発症したお四国病である。

Q36；家族や知友人とのコミュニケーションは？

A36；定年退職後の61歳からは始めた「街道トレイル&へんろトレイル」スルーハイイク遊学紀行においては、出発前に知人・友人には一切知らせて来なかった。その理由は二つある。

その1；“焼き餅”対策。妻には、知人・友人に対しては絶対に喋るなど箝口令をきつく敷いて来た、なぜなのか。四国遍路の通し打ちには、①所要のお金が必要、②十分な時間が必要、③相応の体力が必要、そして、④家族の理解が要件とされている、そのとおりである。四国へんろ札打ちをやりたくとも、諸事情からやれない人が多くいると思う。やれない人からの目線で思うに、“やれる人は勝手にやればいいではないか、遍路だけが価値の象徴では無い”と突き放して捉える人は立派だと思う。ところが、「妬み、ひがみ、しょねみのやっかみ・焼き餅根性」があるものだから、羨ましくなる！ねじ曲がった羨望が渦巻く、すると、そのような相手（大沼香）は見たくも無い、身近な空間から消したくなるという心理が起こる、すると陰口で、有らぬことを作り上げて上糊する輩が、有らぬ詮索を吹聴する輩が——私は『マンキタゲ佞奸根性』人と称する——表れる、そのような者が、吾がコミュニティに散在しているからである。私は西暦1988（昭和63）年当地に居住してからのこの36年間（2024年現在）に、現に対面で、焼き餅のひねくれた言葉を何回も投げ掛けられてとても不愉快な思いをしているからだ。

その2；防犯対策。普段の生活は私と妻の老夫婦2人暮らしであるが、私が長期間留守になるということは妻の1人暮らしとなる。善からぬ人種が跋扈している世の中にして、それが広がると、妻が何かにとターゲットになる可能性が大きくなることから注意・防衛対策の一つでもある。

・・

3回目の四国へんろの時に次のようなことがあった。その頃は友人関係にあった某人から、帰宅後に「なぜ、あれだけ親しくしていた俺に事前に行くと教えてくれなかったのか。なぜ、電話に出なかったのだ、失礼じゃないか！」と電話があったので、私は“私の事情を一々貴方に言う必要は無い、私は貴方に電話をくれ（貰いたい）などは要求していない”、・・・すると相手は怒り心頭になった、20分間も一方的に喋らせた。この人は地域では名の知れた似非歴史家であるが故に知識に自惚れているものだから、自分の価値観尺度に嵌まらない人に相手かまわず文句を付けたがるのである。それ以降私は一切近付いていない。

さて、私より妻の方がずっと人間関係が広い、数多くの知友人から“旦那さんは見えないが、どこに行っただの？”とかなり突っ込んで来た人もいたようだが、妻は頑として“今日も、街中に出かけたなあ、今日は散歩に出かけたなあ”ととぼけた風に何回も同じような返答していたということ。これまでの期間中においては1度も本音を言わなかったということ。妻は私との約束を完全履行したのである、感謝している。なお、妻とのやり取りだが、毎日朝宿を出るとショートメールで“おはよう、歩いているよ”だけ、そして、夕方宿に着くと“〇〇市内の宿に入ったよ”だけである、安否確認だけである。電話するにしても、40・50日間の中で数回だけであった。door-to-door65日間の4回目へんろにおいては1度だけである。スルーハイイク歩き旅は究極の非日常性舞台であると位置付け、日常娑婆とは断絶してこそその意義、擬死再生の旅と意図しているからである、私にとってはそれが当たり前なのだ。だからこそ普段見えない心の景色が見えて来るのだ。

こんな思案中に浮かんだこと、日常生活における人間関係においては、「今日の一日貸し借りせずに」を徹底することにした。

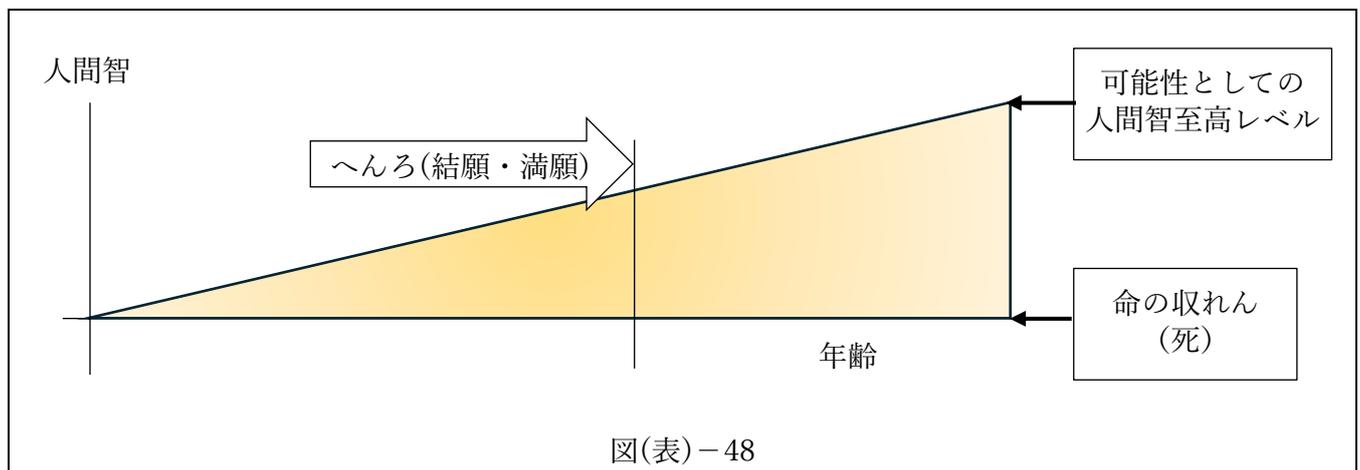
出會いは巡るがこれが最後と
 一期一会の華(はな)祭り
 今日の一[?]日貸し借りせずに
 今日を中締め幕を閉じ
 今日が最高さようなら
 別れを(が) - 美しく(い)

ところで一言、例えばオリンピックの競技選手において、事前に“俺は絶対に金メダルを取る”などと一般社会に公言し、マスコミも大々的に取上げ未完なのに英雄扱い、本人は益々慢心する、しかし、本番で予選落ちの見事な撃沈。結果を出してから吠えろと忠告したい。私の歩きへんろは開始前に他言無用、結果を出したら独り言のように喋って行くとした。帰宅後に私が知人・友人にヒントを与えられてマスコミに情報口コミということを通して地元紙に掲載されたのである。

Q37；順礼を終えて結願・満願を果たした時の心境は？

A37；記述は4回目のへんろに焦点する。1番靈山寺で満願した時、高野山を往復し1番に戻った時、さらにはその2日後にスタート時の88番大窪寺に戻り結願した時、「あらら、終っちゃった！」と。何か大事業を成功させたなどという格別の高揚感は無かった、格別の感動・感激は湧かなかった。嬉し涙が出ることも無かった。淡泊・淡泊な空気間で終わった。何か物足りなさを感じた。今回だけでは無い、他終3回のへんろも、歴史街道無ルーフバイク時のゴールにおいても同様であった。同様のことは本を書いた人達も含めて終くの人が言う。なぜなのか……。

図(表)－48、結論は人間の本能に根差す良い意味での向上心——理想精神の追求という『欲望』にあると思う。表層的な意識では結願が、満願が目標だったかもしれないが、いざ、そこに到達すると、現に貫徹した自分がある訳だから、これまでの苦難は、心の重心なる深奥無意識層の[更新後の華嚴界ZPF]に落ちて行くが、落ちて行ったからには、結願時点では苦難に対する最大の喜びという代償は湧いて来ないのだろう。欲望とは、途絶えること無く命が続くと思っている人生においては、途中の通過点という作用になるのではないかと思う。つまり、**死去の時(死去直前の時)**に達するであろう**可能性としての人間智至高レベル(人間性最高級の立派な人間)手前の一過性なのだ**と本能が判定するからだろう。結願如きで有頂天になるな！という厳しい指令があるのだ。私は少しはあえて意識することがある、毎日9時間前後、30kmを45日間以上も歩き落とし、結願する純粋な歩きへんろは私だけでは無いのだとの意識もある。それよりも“世の中には、吾が国家の平和と繁栄のために奔走し、私が想像出来ないほどの艱難辛苦と戦って苦悶している人達が沢山いるのだ、へんろの如きを苦勞など自慢げに言うのは甚だ失礼なことだ。亡父母の苦勞からすればへんろは取るに足らない。”この考えも抑制的に働くのかもしれない。



別の視点から言うと、人間みなに備わっている菩提心（ほとけごころ）の疼き（『自利・利他』の両面同時追求）にあると思う。煩惱・執着の垢を少しでも落とし悟りに近付きたいとする心、同時に、生きとし生けるもの総ての幸せのため献身したいとする心、すなわち、「自分のため、みんなのため」という理想精神を涵養し、その実現に向けて行動する本能のうごめきがある中で、それは人生永遠のテーマであることから、満願・結願時は一つの節目に過ぎないのだと判定したのだろう。欣喜雀躍することは無いが、他方で出し切った、思う存分やり切った、初期の志は何とか成し遂げたという満足感はじわっと滲んで来る感があった。ただ、高野山で弘法無師の御廟に向かい頭を垂れた時には止めども無く涙が溢れ、年甲斐もなく素直に泣いた。

もしも、歩きへんろを複数人で結願した場合は、どうなるのだろうか？ 想像するに、おそらく、両手握手の上で、ハグをし合い、労苦を慰め合い、大声でバンザイを叫ぶだろう、それはそれで大変結構なことであろう。そうすると、その後の娑婆はコミュニティに戻った日常生活の中においては自慢する、ひけらかすという態度にならないだろうか・・・、しかし、自省的な人は真に立派だと思う。

ところで、英語圏で卒業式に Commencement の語彙を当てるようだが、本来は「始まり」を意味するという。いわば「終り＝始まり」の等式成立である、矛盾ではない。結願如きで有頂天になるな、これからの生き方にどう活かすのか、それが問題だ！という「華嚴界 ZPF」からの厳しい指令があるのだ。また、華嚴経第 12 章「清らかな実践の章」に「初発心時 便成正覚」という一説があり、「初めは終りである。」と簡約される。格言にある「初心忘れべからず」とおり、所期の意志の重要さ、健全な動機の重要性を説いている。「貫中久」精神と合せて、「眼光紙背に徹す」の言葉が結んで来る。「終りは始まり」に触れたが、ここでは逆に「初まりは終り」である。前者は西洋の視座、後者は東洋の視座、それぞれに深い意味があるのだ。

Q38；歩きへんろから何を獲得したのか？

A38；毎回だが帰宅途中、新幹線の中では「へんろを行い人間性に变化はあったのか？」と自問が湧き上がる。45 日以上も自宅を留守にし、四国へんろに金と時間を費やしたからには「人間性が立派になったのか」と自問する、帰宅後いつも妻から同趣旨のことを言われた。“何も変わらない！”というのが答えであり、私の実態である、本音である。四国へんろ如きで人が立派に豹変したら世界中の人が押し寄せる、そんなことはあり得ないのだ。

ただ気があったので以下の三つに要約する。

□1；結局は、充実した人生の意義とは、何気ない同じ状況を繰り返す日常の日々をどう生きるのか、日々の生活での些細なことに問題意識を持ちきちんと向き合うことを大事にすべし！（問題意識の有りや否やである）と気付いた。視界に入った怪しげな「もの・こと」に対して、人間は“あれ???”と自動反応するように出来ている、そこで、どのように対処するかである、

- | |
|---------------------|
| a 逃げるか |
| b 放置するか |
| c 隠された意味を突き止めようとするか |

のいずれかの三者択一である。問題意識が湧いても万事“そのうち、そのうち”が癖となって a・b に墮するのが人間である、a・b の姿勢が習慣化すると、気付かないうちに悪事・悪党の仕掛けにまんまと引っ掛かることになる。

会社人生現役時代に身に染みた危機管理のこと、予期せぬ大惨事・死が迫った時のとっさの行動は、些細な日常の意識の積み重ねが適切な救済に繋がるか否かとなる。そこで思い浮かんだのが有名な柳生家——柳生宗矩（江戸時代初期の武将、徳川將軍家の兵法指南役）の家訓のこと。

小才は、縁に出合って縁に気づかず
中才は、縁に気づいて縁を生きさず
大才は、袖すり合った縁をも生かす

□2；生きて行く上で逃れられない人間関係であるが、日常の対人関係における何かに付けて「**損得勘定**」で計る性格は、**毒素飴を舐めているに等しく吾身にならず、である、“焼き餅”焼きの胡散臭い「マンキタゲ倭姦根性」からは遠ざかるべし！**とあらためて気付いた。（悪友は退け、悪友に近付かず）

□3；**対等互啓（恵）を最大限に尊重すべし！**である。肩書（あらゆる集団における何とか長）は1組織内の閉鎖空間で通用するもの、デスクに付着しているもの。一般社会においては、選挙権は社会的身分を問わず1人1票ということのを例えるが、「そもそも人間人格に優劣の序列は無いのだ、これは絶対真理なのだ。」このことを大前提にすればこそ「私と貴方は違って当たり前」を認識出来て、憎悪の敵対関係は生じないのだと、あらためて強く気付いた。（善友を探し、善友を求む）

Q39；是非ともお勧めしたいことはあるか？

A39；以下の二つに絞る。

（1）四国霊場歩きへんろ

88か所全部の札所を歩きで繋ぐとなれば1,200km、45日間前後は必要となる、なかなか、平易に行えるものではないはず。その中でも、四国霊場雰囲気味わえる代表的エリアが見つけられるはず。どんな移動手段であったとしても、**現地では最低2泊3日の歩きへんろを3回位やって見たらどうかとお勧めする**。基点までは自家用車で行くのもよい、レンタカー利用もいい、もちろん、鉄道・バスなどの公共交通機関を利用するのも有りだろう。現地滞在は、現地移動日も含めると12日間くらい、自宅からの移動日を含めると2週間（約15日間、半月）くらいか。ただし、その場合は、へんろ情報はインターネット上に満載されていることから、計画は全て自前でやること、一度はやって見たらどうか。違う世界観が広がること間違いなし。私からアドバイスすることは一向に差支えは無いが、事前計画、現地対応も不安を抱えつつ自分で思案する中に楽しみが、充実感が生まれる。誰かに作って貰った、設えて貰った舞台に飛び込むのは一見楽しそうだが、面白みが湧かない。報告書本書の中でも強調したが、1人で行くこと、複数ならば夫婦、このどちらかに限る。

車で山形県内出羽百観音を回るのはと違、新しい価値観が芽生え別の世界観を覚えるはずである。特に歩きへんろを経験すれば、観光資源には自然資源、人文資源等の様々はあるが、それらを巡る普通の観光とはまた違う智慧を授かる旅になるのではないのか。

（2）関連して高野山行き

今に生きる神仏習合の聖地、宗派宗門を超えた霊地に直接赴き、その雰囲気を感じて欲しい。真言密教みやしろ教施設の中核部――高野山三大聖地の一つ壇上伽藍域に、図(表)－49aのとおりみやしろの神道神社「御社」(弘法大師が高野山を開いた際に守り神として、地主神の丹生明神・高野明神を勧請した社)が堂々と立ち、真言宗総本山金剛峯寺が管理している。もう一つの奥の院には、同図bのように夥しい数の供養碑、鳥居で結界した五輪の塔が林立している。同図cは御廟橋より奥には燈籠堂、さらにその裏にはお大師が眠る御廟がある。そこに行くと、政治の党利党略とか、宗教の宗派・宗旨などで対立することは如何に馬鹿らしいか、と見えて来る不思議な空間である。



図(表)－49a



図(表)－49b



図(表)－49c

Q40；帰宅後の楽しみは何かあるのか？

A40；帰宅後、まずは以下の作業を行う。

- ✓ 1 記録した GPS 軌跡（トラックログ）をパソコンにダウンロードしてその足跡、および計画ルートとの乖離を確認する。
- ✓ 2 撮影写真を日付毎のフォルダーに仕分けする。
- ✓ 3 宿の領収書も日付毎に分けて綴じ込む。
- ✓ 4 宿で行った記録メモを整理する。
- ✓ 5 ボイス（I C）レコーダーに記録した内容を確認し文字起こしする。

その上で、スルーハイクの都度に人生記録の一つとして報告書なるものを作成する。その後、お世話になった組織・機関やお宿、個人の必要な処に感謝・御礼の印としてその報告書の概要を送付している。これらの作業を日常生活に組み込んでおり、とても楽しい時間帯となる。

Q41；皆纏めて感じたことは何か？

A41；言葉にすると、

私のへんろは、とても楽しい

<p>『壮大な自己格闘塾』 『対等互啓（恵）の華巖ワールド』 『ダイバースティ叡智の海（多様雑多・ごちゃ混ぜの妙）』</p>
--

の世界であった。

「華巖経」の一説にある言葉「心如工画師^{しんによくえし}」（心はたくみなる画師の如し）が浮かんだ、自分を含め自己を取り巻く世界全体は、この自分の心の表れだ、他の全ての人々や、あらゆる事物・事象も私達1人ひとりが描き出す画像に他ならないという、別に言うところ「想念は実現するのだ」とされる。私は、まったくこのとおりだと実感出来た。この私自身にまつわる経過と結果の総ての事象は自分次第の表れである、自分が作ったものだと思う。これらのことは何も空想では無く、最新最先端科学、量子学研究の見解と一致するという。物体と精神の区別を認めないという哲学思想に落ち着くということだろう。別の視点からだが、自助・共助・公序と称して、とかく、共助・公序の必要性を強調し、弱者の見方をした気分になっている識者もいるようだが、世の中の安定に資するエネルギーの配分という面では、8対1対1の割合が妥当だと直感する。「天は自ら助くる者を助く」——天や神は、他人の助けを借りずに自分自身で一所懸命努力する者に力を貸してくれるという意味の西欧故事があり、また、「修身・齐家・治国・平天下」（まずは自分自身を修めよ）という東洋故事があり、さらに、悟りを開いたお釈迦様（仏陀）は、インド各地を巡って伝道の旅に出たが、ある村で大病を患った処で弟子が「何か遺言はないか」と尋ねた処、「お前たちは、ただ自らを灯明とし、**自らを拠り所とし、他人を頼ることなく、修行せよ。**」と話されている。共通点は、人間としての一丁目一番地は“自分を修養すること”である。私から言わせればそんなことは学歴や社会的身分に関係なく当たり前である。「思考は現実化する」とか「想念は現実化する」とも言われるが、犯罪行為も「思考・想念」の一つであると言われれば身も蓋も無いとな

る、安直に闇バイトに足を入れるなどは言語道断である。そして、昨今のネット社会では、何がしかのSNSで繋がっていないと不安でしようがないとなって精神疾患が増加している社会問題も起きているが、他人との相対比較でしか価値を見出されないからだ。吾が心に従順に――従順な心とは自然に湧き上がる良心・致良知――従えば、^{おの}自ずから自己確立が為されるのだと気付いた。

もう一度、初心に立ち返り原点に立てば、**お寺（寺院）の巡礼の証の一つというか形式というか、必ずや般若心経を誦経するだろう。**例えば、般若心経を唱えず、「南無阿弥陀仏」だけとか、「南無大師遍照金剛」とかだけであったとしても、その意味する処は何かである。宗派を問わず一般的なお寺（寺院）は、仏教哲学の象徴、すなわち、仏教のシンボリック的存在であり、思想の根底・根本は共通して仏陀（釈尊）の教義である。中でも具体的な言葉（フレーズ）は「色不異空 空不異色 色即是空 空即是色」で代表されるとおりにごく簡単に言えば「一つの『もの・こと』に捉われるな・拘るな、我執を解き放せ、自らを叩き壊せ。その上で、自らを脱皮・更新・再編しなさい」である。言い換えると、**本堂（本尊）と大師堂（弘法大師）の前で唱えたということは、「日常の腐れ縁・しがらみから自らを解放し、至高の自由世界を吾が心に植え付けるのだ」と公私ともに宣言した、宣誓したことになるだろう。**グループで行くにしても、単独歩行へんろにしても、この意味を正しく理解・認識していなければ、本当のやり切った感や喜びは湧かないのだ。偉そうなことを言うが、このことを私は気付いたので、心あるへんろ仲間と共有したいものである。

再度振り返ると、歩き通すという意志を持ちこのように何とか所期の目標を成し遂げられたのは、繰り返すが、この行動は、私は誰かに指令されて来た訳では無く、何ものにも束縛されず、誰にも相談せず、自らの心に従順になり、自らが決めたことだという意識が無心の世界に落とし込み、無心を素直に受け入れたからこそではないかと思っている。人間は、向上心は絶えず生涯学習に身を置きたいと自発する生き物である、もっと突き詰めると最高の安寧境地を知りたいと深層無意識層が疼き続けているのだ、だから、良心に従順に理想精神を奮わせれば、自ずと生命の充実感を覚えるのだ。

私の日頃の心の深層基点は「ごちゃ混ぜ」にあっても、私も少しばかりの矜持を持っている。一生にたった一度の人生、少なくなった残余の命、身の丈完全燃焼を！ 今こうして思うに、私自身内の最大の敵は「^{しっこく}**桎梏**^{あほうじ}**ア縫自野郎**」大好きな鬼、「自由」を縛る悪魔」である、^{きゅうきょう}窮境に墮することは一番の不甲斐なさとする。 **(※)** 自らが自分を手かせ足かせグルグル巻きに縫って凝り固まっている状態をいう。

^{じ(に)こんげんじょう}而 今現成（今が私の全てである）、全力投球が原動力・推進力とならん。

自称「^{しき}彩色性多重人格」私の人生「ボーダレス・フリーウェイ（Borderless Freeway）！」

徹底的に「freedom Freedom FREEDOM」で生き、逝きたい。

一切の束縛が無い至高の開放感で生き、逝きたい。

「freedom（自由・無碍） flexibility（柔軟・弾力） fantasy（夢・希望）」で生き、逝きたい。

こんなことを気付かされた毎回の四国の歩きへんろであった。

ありがとうございます。

(end)